第六番　天王寺念仏堂の御詠歌（至西調）

（うつせみの御詠歌）

三宅　勝　作曲
松濤　基　編曲

（歌詞は１７ページ）

ポイント注意

●「こころは」の「こ」、「もぬけはて」の「は」、「こえぞ」の「こ」は、それぞれ小さな装飾音ですが、和楽ではこれが大切な声の立ち上がりです。しっかり声を出しましょう。

第六番　摂津の国　四天王寺念仏堂

阿弥陀仏と　心は西に　空蟬(うつせみ)の　もぬけ果(は)てたる　声ぞ涼しき

（法然上人御作）

法然上人53歳の時、四天王寺に詣でられて西門のそばの念仏堂にて、お念仏を唱えて日想観(にっそうかん)を修せられました。そこへ高野(こうや)の明遍僧都(みょうへんそうず)がわざわざお越しになって、散り乱れた心で申すお念仏についてたずねられました。上人は、迷いの心を払ってお念仏しようと思うのは、生まれつきのままの目や鼻を取りはらいお念仏するに等しい事と仰せられて、凡夫のための念仏往生を説かれました。このお歌は、お念仏を唱えて浄土へまいる相(すがた)を蟬の抜けがらにたとえて、念仏三昧(ねんぶつざんまい)の境地をお示しになったお歌であります。

大意　西の方にまします阿弥陀さまをお慕い申して、浄土を願い一心にお念仏すれば、ちょうど蟬の抜け殻のように、何もかも忘れ果てて、苦しみや悩みから抜け出して、すがすがしい声でお念仏を喜ぶことができるのです。

（楽譜は１８ページ）